

西宮 えびす

平成二十五年 新春号

正月・十日えびす

御神影頒布始祭

文化研究所だより
諸国探訪／宵田西宮神社



西宮神社境御祭再興50回記念
西宮太々講社再興50回記念
平成24年9月吉日



鶺鴒 鶺鴒神楽奉納

平成二十四年十月十九日

酒ぐらルネサンス
平成二十四年十月六日、七日
第十六回酒ぐらルネサンスと食フチアが当社をメイン会場にして開催され、二日間で十三万人を超える来場者で賑わいました。



岩手県普代村の鶺鴒神社を基点に、毎年一月から三月にかけて陸中海岸を廻る神楽。夜神楽の「宿」を先の大震災で失ったが、関西方面で支援の輪が出来、今回も公演に先立ち「大震災復興祈願奉納」として恵比寿舞ほかを奉納されました。魂を揺さぶる感動的な舞でした。

白鹿記念酒造博物館

新春企画展・堀内えびすコレクション

平成二十四年十二月五日～二十五一年一月十四日

恒例により、医学博士・郷土史家、故堀内冷氏の蒐集された恵比寿様を中心とする資料の展示が行われています。
<http://www.hakusika.co.jp/museum/>

西宮神社記念切手

一昨年に続いて記念切手を新たに発行します。十枚シリーズ、十二月二十四日から西宮市、芦屋市の各郵便局で発売されます。



西宮神社がモチーフとなった切手シート

石造り鯛

(表紙写真)

渡御祭再興五十回、西宮太々講社再興五十回を記念して「石造りの鯛」が神池池畔に建てられました。西宮まつり協議会と西宮太々講社の両者からの御奉納。参拝の折に是非、願いを込め撫でて頂きたいと思えます。

《訃報》

西宮神社・前権宮司、西宮文化協会顧問吉井貞俊は、去る十二月二日に逝去致しました(享年八十三)。葬儀告別式は十月六日、雨上がりの秋空の下、三百数十人の参列を頂き執り行われ、幽世へお見送りしました。
前権宮司は昭和三十五年に当社禰宜に就任以来、平成十六年に退任するまで四十四年の永きにわたる奉仕でした。生前のご厚情に深謝し、謹んでご報告申し上げます。

編集室から

●西宮神社では恒例の祭典・行事に加え、毎年新しい行事を行っております。昨年は「夏休み神社体験学習」を行いました。詳細は前述した通りですが、みなさん夏の暑い中、熱心に講師の方の話を聞き、境内清掃などにも真面目に従事していました。

一昨年本殿が復興五十周年を迎え、それに伴い各末社の改修工事を進めております。今年は神宮の式年遷宮という国民にとって特別な年です。えびす様の福をお受け頂き、今年という年が皆様にとって良き年となりますようお祈り致します。

西宮神社 公式サイト

検索

<http://nishinomiya-ebisu.com>

西宮神社公式サイトQRコード



えびす

NISHINOMIYA EBISU
平成二十五年 新春号

西宮えびす 平成二十五年新春号(通巻第三十八号) 平成二十四年十二月一日 発行
発行／西宮神社 〒690-0974 兵庫県西宮市社家町1-17 電話 0798-63-0621 FAX 0798-63-1040

編集／文化課 印刷／小西印刷所

西宮神社宮司 吉井 良昭

謹んで新年のお慶びを申し上げ、氏子、各講員そして崇敬者各位の益々のご繁栄をお祈り致します。

既にご承知の通り、本宗と仰ぎ奉る伊勢神宮では第六十二回の式年遷宮が十月に斎行されます。二十一年に一度、ご正殿を新たに造営し大御神様にお遷りいただくとともにご神宝類をも新たに調え、更なるご神徳を仰ぎ奉るといふ国民挙げての神事が執り行われます。日本人が齊しくこのころを一つにして盛大且つ滞りなく斎行できますよう、皆様共々願うところであります。

またえびすさまとともに福の神として信仰の篤い、いこくさま、即ち大国主命さまをご奉祀されている出雲大社でも、六十年ぶりの大規模な改修を終えられて、本年五月に本殿遷座祭が厳肅に執り行われます。神々の鎮まります神風の伊勢の地「神宮」、神々のふるさと八雲たつ出雲の地「大社」でご遷宮が執り行われますことまことに慶賀の至り、良き歳であります。

当社におきましても本年は大きな節目の歳となります。それはえびすさまのお姿が描かれた御札「御神影札(おみえふだ)」が幕府の御定法により全国各地に賦与されることとなつて三百五十年を迎えるからです。(詳細は七・八頁に掲載しておりますのでご参照下さい。)

この意義深い年を迎えるにあたり、昨秋十月に各地にて御神影頒布に携わっておられる方、氏子の方等のご参列をいただき「御神影頒布始祭」を斎行致しました。一昨年に刊行しました江戸期の御神影頒布関係史料集からもわかるように、四周を海に囲まれたわが

国の津々浦々はもとより、冬は雪深き山々村々をも、元結や箸などの土産を手に毎年頒布が続けられ、えびす信仰は各地に限なく広がっていききました。祭典ではこれらの先人に敬意と感謝を捧げるとともに、代々に亘つてお受け頂いている各地の皆様のご繁栄を祈念し、直会の席上では参列者一同が更に大勢の方々へえびす大神様の福を授かっていたらこうと、こころを新たに致しました。

この御神影札は毎年その上に張り重ねて祀るという慣わしがあります。二百体以上も重ねられたものもあります。今年より初めてお受けになられる方は、頒布開始三百五十年目の年が祀り始めとなります。そして年毎に一体一体と重ねて祀っていただき、えびすさまの「福」をご自身に、ご家庭に、またご商売にと積み重ねて行かれるよう願っております。

ご崇敬の皆様には、このえびすさまの御神影をお祀りいただき、日々えびす大神様の柔和な、お優しいご尊顔を拝することにより「福」に満ちた生活をお過ごしになれますようお祈りを申し上げます。

宵田西宮神社



【鎮座地】兵庫県豊岡市日高町宵田六十二 宵田区元区長 西 教之

寒村「宵田十日えびす」物語

●小さな村の大きな祭り

雪国但馬の冬の寒さは厳しい。夜が明けきらぬ早朝、十銭か二十銭を握りバリバリと凍てた雪を踏みしめ心を躍らせながら神社に向かう少年(幼年)。境内には既に多くの参詣人が列をなしてあり、たちまち少年は中に加わります。寒い正月明け「十日えびす」の朝です。心を弾ませながら少しずつ押されながら前へ前へと進む子供心は、クジ引きの嬉しさと景品への期待が膨らみ寒さを忘れず。この原稿を書きながら幼い頃の郷愁をばせ、その光景が脳裏に甦り、私の記憶は今も昭和十年頃に立ち返ります。



宵田十日えびす祭 参道を埋めつくす参詣人

伝統のある「宵田十日えびす」は古くから近在に広く知られ、雪が降つても寒くても、「福」を求める近隣の市町村や村からの老若男女の参詣人で境内は溢れます。雪深い小さな集落がこれだけの多くの人を集める「十日えびす」は但馬では珍しいといえます。

●歴史を刻む「福引き」の祭り

今も続く「宵田十日えびす」は歴史の古さを誇ります。ずっと以前、明治の古老に尋ねても既にその頃にも参道に屋台が立ち賑わつたと語っています。神社の石灯籠は「寛政」と刻まれ、宮は江戸時代から存在したことを示していますが福引き「宵田十日えびす」が何時の時代から始まったかは不明です。しかし、平成、昭和、大正、明治と遡っただけでも百数十年を数え、そこに脈々と続く伝統の福引き「宵田十日えびす」の歴史の古さを推察するより外ありません。

●クジは和紙の「こより」で作る

福引きの仕組みは他に類をみない独特の趣があり珍しいといえます。それは和紙の「こより」の端に景品名を記入し一万本程のクジを作り数束に分けます。えびす祭当日、クジの束を手にする売り場から参詣人が福を願いながら一本も二本とクジを引き、すぐにワクワクしながら「こよりの」端を広げ景品を確認することです。かつてクジになる、こよりは、村中で協力してよりました。

●「こよりのクジ」は参詣人の心をくすぐる趣向です

「こよりのクジ」は参詣人の心をくすぐる趣向です。引継がれ親しまれています。●「どんどん」の焚き火に暖を取る さて次の趣向はクジ場の前に、どんどん、のような焚き火

をします。寒い季節ですから何よりのご馳走なのです。参詣人は足を止め焚き火を囲み暖をとり、歓待の甘酒を啜りながら興味津々とおもむろにクジを開くひと時に楽しみがこみ上げてきます。空クジはなくこのような人の気持ちを捉えた風景は実に味わい深く、やがて景品に交換した参詣人はお参りを果た満足感に浸りながら、手にした品を見せ合い福を得た喜びの笑顔で帰路に着きます。



「どんどん」のような焚き火で暖を取る人々

●えびす笹(福笹)が福の到来

まだ他にも特徴があります。福笹作りです。十日えびすが近づくとき野山から数本の竹笹を刈つて来、吉兆の福飾りを取り付け「えびす笹」を作りクジの景品とします。手作りのお粗末な吉兆ですが不思議に笹の葉は長く持ち、参詣人はそのしなやかな「えびす笹(福笹)」が当たったことを目出度い福の到来と殊の外喜びます。

●宵田十日えびすは村人団結の祭り

この祭りは準備が大変ですが村人の努力と協力で全てを仕上げていきます。それは理屈抜きに村人の絆を深め「宵田十日えびす」の伝統が脈々として守られていく源泉となっています。そして最近「宵宮」も取り入れ参詣人も増えこの祭りを「層充実させています。まだまだ伝統ある「宵田十日えびす」の物語をお話したいのですが…。縁があれば次の時に譲りたいと思います。

正月・十日えびす

平成二十五年
一月～五月の行事案内



(えびす舞)

百太夫神社祭

祭典当日は徳島県から「阿波木偶箱廻しを復活する会」や、西宮中央商店街の「人形芝居えびす座」が神前で「えびす舞」などの人形廻しを奉納します。またこれに先立ち午前十時から商店街で伝統的なえびす舞の門付けも行われます。



(湯もみ)

有馬温泉 献湯式

有馬温泉から金泉(きんせん)が奉納され、有馬温泉の旅館街の繁栄を祈願します。拝殿に於いて湯女(ゆな)に扮した芸姑さんが太鼓のはやしに合わせてお湯を適温に冷ます「湯もみ」を披露した後、これを奉納します。



(餅つき)

節分祭・若戎会餅つき

二月三日は本殿で、一年間の無病息災を祈る節分祭を執り行います。この節分祭で神饌として供えられるお餅は、十日えびすに奉納されたもち米を使って、西宮神社の氏子青年会・若戎会や福男達によって威勢の良い掛け声と共につかれます。

紀元祭

二月十一日建国記念の日は「建国をしのび、国を愛する心を養う日」です。神武創業を偲び我が国我が国家の護持に尽力された先人に対する感謝と国民の平安を祈願する祭典が執り行われます。



開門神事福男選び

十日えびす大祭が斎行されると午前六時の開門と共に外で待ついた参拝者たちは一斉に本殿へと走り出し、本殿にいち早く着いた三人は福男として認定されます。この神事は江戸時代頃から自然に起こってきたといわれており、開門時、赤門前には約五千人もの参拝者が今か今かと開門を待っています。



(福男たちによる鏡開き)



(祈年祭)



(浦安の舞)

祈年祭

祈年祭は「とじこいのまつり」とも称し、十一月二十三日に行われる収穫感謝の祭り「新嘗祭」と対になり、五穀豊穡と国家安泰を祈るお祭りです。



太々神楽祭

江戸時代中頃より始まったとされる「太々神楽祭」は五月日～十日まで日ごと各講社が神楽を奉納し、祈願します。



新春初祈禱のごあんない

正月・十日えびす期間は特別に本殿にご昇殿いただいでご祈禱奉仕致します。どうぞ年初めのご祈禱を受け福をお授かりになりますようご案内申し上げます。

※ご遠方の方やご参拝の出来ない方は郵便での申込みも承っております。

◎新春祈禱受付時間

一月一日 午前零時～午後六時
二三日 午前九時～午後六時
九日 午前八時～午後十時五十分
十日 午前六時～午後十時五十分
十一日 午前八時～午後十時五十分

※正月・十日えびす期間にご祈禱を受けられた方には会館にてご休憩して頂ける「お茶券」や「干支神楽(土鏡)」をお渡し致します。



福笹(大) (3,000円)



えと鈴 (1,000円)



鯛みくじ (300円)

| | | |
|------|------|----------------|
| 一月一日 | 零時 | 初太鼓 |
| 二日 | 六時 | 歳旦祭 |
| 三日 | 十時 | 奉射事始祭 |
| 五日 | 九時半 | 元始祭 |
| 七日 | 十一時 | 百太夫神社祭 |
| 八日 | 十時 | 昭和天皇祭 遥拝 |
| 九日 | 九時半頃 | 招福大まぐろ奉納式 |
| 十日 | 十四時 | (宵えびす) 有馬温泉献湯式 |
| 十一日 | 十六時 | 宵宮祭 |
| 十一日 | 四時 | (本えびす) 十日えびす大祭 |
| 十一日 | 六時 | 開門神事福男選び (残り福) |

| | | |
|-------|-------|-----------------|
| 二月三日 | 十時 | 節分祭 |
| 九日 | 十一時 | 初午祭 (境内末社 神明神社) |
| 十一日 | 十時 | 紀元祭 |
| 十七日 | 十一時 | 祈年祭 |
| 三月二十日 | 九時二十分 | 春季皇霊祭 遥拝 |
| 四月二日 | 十一時 | 境内末社 松尾神社祭 |
| 三日 | 十一時 | 境内末社 梅宮神社祭 |
| 九日 | 十一時 | 境内末社 宇賀魂神社祭 |
| 二十九日 | 十時 | 昭和祭 |
| 五月一日 | 十時半 | 西宮郷醇友会太々神楽祭 |
| 三日 | 十一時 | 大阪第一招福組太々神楽祭 |
| 四日 | 十一時 | 日供講社太々神楽祭 |
| 五日 | 十三時半 | 西宮太々講社神楽祭 |
| 六日 | 九時 | 境内末社 六甲山神社祭 |
| 十日 | 十一時 | 諸国講社太々神楽祭 |
| 十五日 | 十一時 | 本えびす講社太々神楽祭 |
| | | 境内末社 大国主西神社祭 |

※毎月一日、十日、二十日は本殿にて旬祭が斎行されます。どうぞご自由にご参列ください。



瑞寶橋

有形文化財登録

西宮神社の神池に架かる石橋二基は平成二十四年九月、登録有形文化財への答申が行われ登録されました。

嘉永元年（一八四八）、八馬喜兵衛ら酒家中奉納になる石橋。両橋詰に袖高欄を備える優雅な造り。西宮で少年時代を過ごした作家、村上春樹の「辺境近況」にも登場する橋としても有名になっている。

嘉永橋



文化研究所だより(二)

西宮神社の願人頭

前回は、二七世紀末〜一八世紀初頭の西宮神社の神職・神子について紹介しました。今回は、彼ら以外の構成員のうち、願人頭についてご紹介したいと思います。

願人頭とは、西宮神社に常駐し、諸国でえびすの御神影札を頒布するえびす願人と呼ばれる人々を統括する、総元締めのような存在であり、正徳四年（一七二四）までは中西家、辻家の二家がありました。慶長九年（一六〇四）から豊臣秀頼による西宮神社造営が行われた後、西宮の氏子二〇人程へ散銭（賽銭）の支配を仰せ付けられ、彼らを願人と呼称したことはじまるとされており、その後どのような過程を経たのかは不明ですが、貞享元年（一六八四）時点では前述の二家のみがとめています。

彼らの職掌は大別して二つあります。ひとつには社内の雑用などです。掃除や破損箇所の修理といった神社の維持管理や、夷社の散銭、勧進料の取り集めとその集計、毎月の勘定、さらには神事の際の神供調進、といった社用・神事の補助に従事していました。また、神社より頒布する御神影札も彼らが管理していました。ただし、金銭の勘定や御神影札の印刷は、社用日記に「関屋算用、夷ノ御社ノ散銭願人取集候、神主相封社家立合候」（元禄一四年五月



写真一 関屋戦災で焼失

にあった関屋（写真二）という建物内で願人頭と神主・社家立会いのもと行われることとなっていました。ちなみに、夷社の散銭は江戸幕府より社用のみ充当することが定められていましたが、その散銭箱の鍵は願人頭が預かっていた。

ふたつには諸国願人の統括です。具体的には①御神影札頒布を許可する旨の証文（免状）の発給、②役銭の徴収、があげられます。①については、元禄五年（一六九二）



写真二 中西久元の免状（新潟県 蕪木家文書）

の越後国十日町野村七太夫宛の免状を写真二に示しましたが、この交付を以て西宮本社から認められた願人となるわけです。文中「是ハ壹年切之証文、翌年ヨリハ可為反故」などあることから、

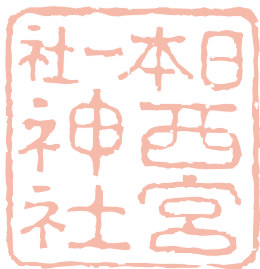
その効力は永続的ではなく、毎年更新する必要があったことが読み取れます。ただし、実際にそれがどの程度守られていたかは不明です。つきに②について、役銭はいくらで、どのように使用されていたのでしょうか。神社の内規である貞享二年の「西宮定書之覚」によれば、役銭は一人年額五百文ずつ徴収し、経費を除いた残額のうち、三割が修理料（神社維持費）、七割が願人頭の取り分と定められていたことがわかります。役銭の総額としては、摂津・播磨・丹波など神社近隣の国々の願人より銀五百匁程（宝永二年四月一二日条）、東国願人より金一九匁（宝永五年一月九日条）などという事例がみられます。

このように、願人頭とは、神事行為（装束を着用のうえでの奉幣・祝詞奏上・祈禱など）を行う神職身分ではなく、西宮神社の維持管理と金銭関係を管掌するいわば、諸国願人から役銭を徴収し、神社の維持費と自らの収入に充てていたのです。このふたつの職掌は個別に切り離して考えるべきではないでしょう。彼らこそが神社における「俗」の世界を切りまわしていたといえるのではないのでしょうか。

なお、正徳三年から四年にかけて、神社を二分する大きな争論が生じ、幕府の裁許により願人頭のうち中西家は追放となり、以後願人の統括は神主が直接行うこととなります。また、時の当主中西平次右衛門の子息のちに漢学者になったよう⁽³⁾で、願人頭の家が当時においては知識階級であったことがうかがえます。

(1) 公定相場とされる金一兩〇匁換算で、金八両余。
 (2) 関東甲信越と東北地方の願人。寛政二年（一七九〇）では四七九人いたとされる。
 (3) 服部白貞（はくけい）。江戸にて服部南郭に師事、その後南郭の婿養子となりあつとを継ぎ、生没年は正徳三年（一七二二）〜明和四年（一七六七）。

御神影頒布始祭 創始される



今から三百五十年前の寛文三(一六六三)年、徳川四代將軍家綱公は西宮戎社の御社殿の造営を進められると共に、神社の運営の基礎を確固たるものにする為、「日本國中像札賦与御免」を仰せ渡されました。寛文七年、恵美酒・田神・神馬札三像の神札(御神影札)発行頒布の免許を幕府より賦与されてより以降西宮神社の御神影札は、各地に社用係を置いてこれを配る組織を整え、信仰を広めて行きました。

海上守護、大漁満足の神、海原知らず蛭児大神・えびすさまは、時の流とともに市の神、

現在頒布の御神影札



えびすさま



大國さま



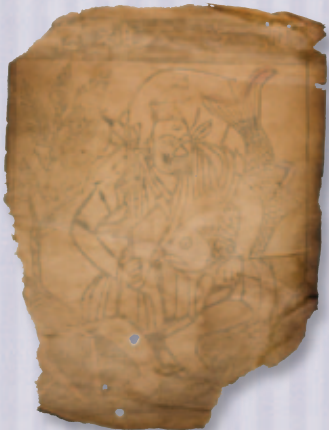
長野県の館林家に伝わった御神影札(左右二枚とも番上が昭和四十三年に頒布されたもの)



約百年前、明治の末頃の御神影札



約二百年前、文政元年(一八〇八年)頃の御神影札



約三百年前、享保年間(西暦一七〇年代)の御神影札

長野県下伊那郡の館林家に祀られていた御神影札は、向かって右に二百五十五枚、左に二百五十二枚が重ねられており、単純に計算すると昭和四十三年から遡ること、約二百五十年前からという事に成ります。



福の神、商売繁昌の神と様々な信仰を加えてきましたが、明治以降も益々崇敬厚く、江戸期の講社組織も残り、三百五十年を経た今も続いています。

この間、寛文三年に造営された国宝指定の本殿は昭和二十年、空襲により烏有に帰し、同三十六年に再建された本殿も戦災から数えてまる五十年の阪神大震災に被災するなど、幾多の困難に遭いながらも御神影頒布の伝統は脈脈と今に伝わっております。

この伝統を確固たる物にすべく、伊勢の神宮の「大麻頒布始祭」に倣い、二十四年十月十五日、氏子世話人、全国の御神影頒布関係者を招き「御神影頒布始祭」を斎行いたしました。



御神影頒布始祭

夏休み 神社体験学習会 開催

概要

懸案であった子供への教化活動「夏休み子供会」を、神社体験という形で去る七月二十四日、二十五日の両日行った。

参加人数は男女各十人とし、白衣袴を貸与して二日間を過ごさせる。内容は、学校・家庭で教え切れない作法・道徳教育を根幹に置く。遊びの要素も取り入れる。このような方針の下、募集要綱、日程、申込書を一枚にまとめ、六月十日より公開し募集開始した。

六月十日の旬祭に於ける宮司講話で此の事が紹介されるや、直ぐに二件の申込みがあり、申込みは順調で、ホームページ、掲示板や市内子供会に案内をした事もあり、七月一日に定員に達した。



記念写真

実施

七月二十四日当日、全員時刻まで来社。説明注意の後改服。着付けは大変であったが、装束屋さんが心配して手伝いに来てくれたこともあり、時間通りに終え、白衣袴姿で拜殿にて正式参拝、研修会らしく笏を持って記念写真撮影。

最初の授業は、「小笠原流礼法入門」(小笠原清忠著)を参考に、姿勢、歩き方、立ち方、座り方、お辞儀の仕方を実習した。応用として、他家を訪問した際の履物の脱ぎ方、なども教授した。

昼食は、お弁当を、指導員も共に「たなつもの 百の木草も天照す 日の大神の恵み得てこそ」の唱え言葉を唱和して戴いた。

午後は、男子は神職作法の稽古、女子は巫女神楽の稽古を行った。午前の礼儀作法を基礎に、笏の持ち方、揖、拜、応用で大麻所役を学んだ。巫女神楽は、豊栄舞の稽古を行った。

続いて、遊ぼう！と題して、西宮中央商店街で活動する「人形芝居えびす座」の二人が出向して演じてくれた戎舞を鑑賞。同じく戎座人形芝居館に依拠する枇杷さんご夫婦により、様々な独楽回しが実演され、会場は歓声に包まれた。

第一日目を終え、明日の注意を伝え、白衣袴をたたみ、帰途についた。



昼食



神職作法の稽古



戎舞鑑賞



「つなみのえほん」読み聞かせ



修了式



二日目、全員出席。白衣袴に着替えて清掃奉仕。落ち葉の少ない時期だったので、拭き掃除中心となった。

掃除が終わって午前の授業は、道徳講話・偉人伝。

親、ご先祖様の大切さ、それに対する敬意の表し方などを話し、そして今日からは、お父さんお母さんに正しく挨拶をしましょう。朝夕の、出発前後の、そして食前食後の挨拶をすることが小学生から大人になる第一歩です、父母に寄りかかる心を捨て、しっかりと大人になりましょう、と諭した。続いて「十三歳からの道徳教科書」の読み聞かせ(橋本左内「稚心を去る」)を行い、やりたい事をやるというのは子供、やらねばならない事をやるのが大人である、早く大人になりましょう、と話し聞かせた。

時間後休憩時間もこの本を読んでいる子が三見られた。話も真剣に聞いていたように思う。

次の創作紙粘土細工「えびすさまを作る」では、同じ町内のアトリ工風姿花伝の森村さんが材料も揃えて講師として来社、社務所・資料展示室西の通路にて、紙コップに紙粘土を巻きつけ造形してゆく作法でえびすさまを創作した。六年生と四年生とでは少し差が出たが、お昼ご飯を早めに済ませて仕上げた子もいた。

午後からは、西宮の昔話と東北大震災の話。御鎮座伝承・鳴尾の漁師の話と、宮城県南三陸町、先の大震災で甚大な被災をされた志津川西宮神社、工藤宮司の御息女、くどうまゆみ氏の「つなみのえほん」を紙芝居風に仕立てたものを巫女が読み聞かせた。

最後に宮司講話、宮司からは今回の企画の意義、教育のあり方などについてお話があり、引続いて修了式が執り行われ、ひとりづつ修了證が授与された。記念写真、「十三歳からの道徳教科書」も受け取り、白衣袴もきっちりたたんで終了となった。

両日とも冷房無しで通したことも成果の一つと考えるが、さらに工夫を加えて次年度もこのような企画をしてゆきたいと思う。

夏えびす

平成二十四年から、「正月・十日えびす」に対する「夏えびす」を盛大に行うことと成りました。

従来からの七夕、沖惠美酒神社祭、奉納子供相撲、本社の夏祭・萬燈籠を総合、これに「あらえびす夜まつり」を新たに加えて七月中を、えびすさまの荒御魂を祭るとされている境内末社荒戎神社(沖惠美酒神社)を中心とした「夏えびす」として氏子崇敬者の皆さんに楽しんでいただき、御神徳を受けて頂くようにいたしました。



七日夕刻から、神池を中心笹竹を立て、参拝の子供らに願い事を書いた短冊を取り付けてもらい、池の中にはLED電球の灯りを約八百個沈め天の川を創出しました。八日の日曜日には沖惠美酒神社奉納子供相撲大会、九日の沖惠美酒神社宵宮は、あらえびす夜まつりを行い、松林の中にビアガーデン、西宮の旨酒の店などを設け夏の始まりを楽しんでいただきました。

沖惠美酒神社(荒戎神社)は境内南方の洗戎(現・荒戎町)に鎮座していましたが、明治五年境内現所在地に遷座したものです。通称「あらえびすさん」と親しまれています。十日十時からの祭典に続き、あらえびす夜まつり二日目の準備。当夜は初日のうわさを聞いてお越しになった人々で前夜の三倍近い参拝者で賑わいました。また「沖惠美酒神社・必勝守り」も大人気でした。

二十日十時、江戸時代末に始まったと言われている夏祭を斎行。当時から石燈籠に明かりを灯していたようですが、萬燈籠として賑やかに変わったのは近年の事で、ことに蠟燭の灯りで光の回廊のように彩るようになったのは平成十五年頃からです。



神池 天の川



夏えびす夜まつり



七夕



沖惠美酒神社



荒えびす神社(沖惠美酒神社)月次祭 斎行

夏えびすの趣旨を引き継いで、毎月十日に月次祭を斎行することになりました。本社の中旬祭に続いて十一時より行っています。